

オタクの人付き合い —「自己責任」と「世間」—

Socializing as a *OTAKU*
— "self-responsibility" and "*SEKEN*" —

渡邊 秀司・長光 太志

要 旨

この小論は、「オタク」と自認する人たちが形成する集団について、以前から継続的に研究が続けている過程で、あらためて生じた彼らの人間関係について、調査を行うための概念の整理を行おうというものである。今回は「自己責任論」「ずるい」という考え方について概観したうえで、それらの背後にあるのではと考えられる「世間」という考え方について、先行研究の整理を試みた。

キーワード：自己責任論・ずるい・「世間」・オタク

1. はじめに

いまさらながら人間関係のあり方に関心を持っている。あたりまえのことであるが、人は何らかの集団に帰属している。所属する集団の中で、それぞれの価値観に基づき行為をしている。その集団の中で、所属する人たちにとって関心となる事象が展開する。人間関係は、集団の構成員にとって重要な事象の一つだろう。その関係の円滑な運営ができるのか、そのなかで不都合を起こすことなく過ごすことができるのか、自らの不快を感じることなく関係を改善できるのか、自らの欲望を満たすためにその関係に干渉していくのか、構成員たちの思惑はさまざまあるだろう。しかし、構成員となった以上集団内の人間関係を無視することはできない。その集団の人間関係に対して不快を感じる際にどの

ような対応をしていくのか、それも集団の構成員にとって関心のあることだろう。日々、人間関係に伴う事象にわれわれは右往左往している。人間関係は「悩みの種」である。

以前から「オタク」と自認する人たちについて関わりながら、聞き取り調査を行い、それについての論文も書いている¹⁾。そのなかで考察すべきことなのではと思うにいたったことが、人間関係のありかただった。この集団について考察する意義を考えるとすれば、浅野智彦が『趣味縁から始まる社会参加』の中で展開する公共性についての議論が、示唆的である。浅野は社会参加というテーマについて考察を深めていく過程で、オタクについて言及する。具体的には、趣味縁と公共性との議論において生じる対立軸が、オタクをめぐる議論にきれいに表れていると浅野はいう。つまり「仲間内で閉じた同質な関係なのか、それとも異質な他人への通路なの

か」という対立軸である（浅野 2011:91）。この知見は個々の集団とそれ以外の周囲との関係性を考えるうえで、重要である。そのうえで、あらためて「オタク」と自認する人たちの集団を考える意義がどこにあるのだろうか。

彼らと「オタク」と自認しない人たちとの間の緊張感については以前の論文で考察したのだが、調査の過程であらためて疑問に感じたことがある。「オタク」と自認する人たちどうしの人間関係である。中島梓は、現代人は「コミュニケーション不全症候群」を抱える存在であると述べながら、「おタク」のコミュニケーションの在り方について述べるのであるが、中島が言うようなコミュニケーションのあり方も含みつつ、彼らのコミュニケーションにはそれだけではない何かを感じていた。それを考えるうえで「優しい関係」をキーワードとしていたのであるが、それだけで十分考察できるのだろうか。以前より『「オタク」と自認する人たちが形成する集団（以下「オタク集団」）』に所属する人たちに対して継続的に調査をしているが、その過程において人間関係の作り方において以前より変化があるのではと感じている。もちろん、感じているだけでは論として述べるには十分なものにならない。そのためにこの小論で、論点を洗い出していこうと考えている。現在「オタク集団」内部の人間関係について、そのあり方を考えるために参考になると考えられる知見ではないかと論者が考えているものがある。それは「自己責任」「世間」という二つの考え方である。自己責任論については、主に福祉や法倫理の分野で分析が進められているおり、「世間」についても良質な論考がいくつも存在する。この考え方が「オタク集団」内部の人間関係にどの程度反映されているのか、ここではそれを調査するための整理を試みたいと考えている。

2. 自己責任論について

自己責任論について、貧困と生活保護で強調される自己責任論について分析を行った石川時子のものを参考にしながら整理していく。自己責任は比較的新しい言葉として定義されるものであるとされており、石川は辞書的な意味を分析しながら『自己責任』が使用される一般的な場面とは、肯定的で明るい場面ではなく、良くない結果であり、本人にとって苦しい場面での、苦しみや負担の所在を問うような使用方法であること¹⁾なのではとしている（石川 2017:6）。自己責任という考え方は「結果の不利益」が生じる場合にのみ、責任主体が問われる」と石川は指摘する。そのうえで、自己責任論の展開について整理する過程で、1991年の証券取引不祥事に伴う「自己責任」概念の使用について論じる種村剛の論文（種村 2005）²⁾、（自己決定＝自己責任）という観点から論じる宮台真司の議論、2004年のイラク邦人人質事件、生活保護「不正受給」パッシングなどを追いかけてながら、自己責任論の展開について述べていく。そのうえで、自己責任を批判的に使用する、あるいは考察する論調を「反・自己責任」論とし、その分類を試みる。自己責任論と「反・自己責任」論との議論の流れの中で、「反・自己責任」論は自己責任に基づくパッシングにどれほどの効果があったのか疑問だとしている。その背後に「批判を展開する多くの一般の匿名人たちの根底にあるのは『ずるい』という感情」なのではと推論し、さらに「より深刻なのが、当時は投資する資産のある人が持つ不正感であったが、現在は『持たざる者が持たざる者をパッシングする』という、恨みとしてはより根深いこと」にあると石川は指摘する（石川 2017:15）。そのうえで、自己責任論に対して「反・自己責任」論がどのような発想を提供すべきなのかを考察していくのであるが、それには責任概念の再考がひ

つようなのではないかとしている。

この論では石川が指摘した「ずるいという感情」に注目したい。自己責任という言葉にともなう「ずるい」という感情と、以前別稿で論じた「優しい関係」が実は関係しているのではと論者は考えている。土井隆義が論じる「優しい関係」について、別稿で渡邊がまとめたものを改めて概説すると、それは、自分の対人レーダーがまちがいに作動しているかどうかつねに確認し合い、相手から反感を買わないように常に心がけるかつてよりもはるかに高度で繊細な気くばりをともなった人間関係のことであり、このような「優しい関係」をとり結ぶ人たちにとって自分の身近にいる他人の言動に対して常に敏感であり続けなければいけないというものである（渡邊 2018:48）。この人間関係と石川らが考える「ずるいという感情」を関連させることはできるのだろうか。次節では「ずるい」について整理してみたい。

3. ずるい

自己責任論に対する「反・自己責任論」の展開は主に貧困、ワーキングプア、生活保護受給などにかかわる議論で展開されている。この議論の構成には様々あるが、それを批判する「多くの一般の匿名人たちの根底にあるのは『ずるい』という感情である」（石川 2017:15）としている。この批判は「待たざる者が持たざる者を批判する」より根深いものだと言っている。この「ずるいという感情」に対抗する議論をどのように構築していくのかは難しいという。

石川らの議論を読み進めていく中で、「ずるい」という感情がダイレクトに問題にかかわるとき、それに基づく感情的な批判を突き崩すことは難しいことがわかる。「ずるい」はいたって感情的・個人的な感情にすぎないものであろうが、人間個人の行為の機動力として働いているのかもしれない。この点は十分な論証ができ

ていない。今後の課題として残されているが、この課題について考察を行うためにもうすこし「ずるい」に関わる議論について整理していく。

たとえば、「ずるい」を主題に調査・研究をしたものに、玉置哲淳・山本健司による幼児の「ずるい」観念についての調査研究がある。幼児の公平性に関わる研究として、幼児期において「公平概念を基本的に使っている」という発想に基づいた調査である。玉置らは「交代・順番・仲間入り・独占」という4つの項目から幼児に聞き取りを行ない、検討している。この論考の問題関心はふたつあり、「一つは、子どもの生活場面でどのようなことを「ずるい」ととらえ、発達心理学的な手法で行われてきた図版を用いて検討すること。二つには、内容上は、人権保育的な発想で子どもたちの間にある社会的コンフリクトの際に公平概念の使用に焦点を当てること」（玉置・山本 2007:16）にあるという。さらに「ずるい」に注目するのは、幼児期において早い段階から「ずっこい」といった言葉が使われていることを理由としている。そのうえで、幼稚園に通う4歳児9名（男児3名、女児5名）、5歳児11名（男児3名、女児8名）および、保育所に通う4歳児9名（男児3名、女児6名）、5歳児15名（男児6名、女児9名）に聞き取り調査及び図版を使用した調査を行っている（玉置・山本 2007:18-9）。そして、幼児の「ずるい」という言葉の使い方から、公平性というものをどのように使用しているのか、公平性概念の発達過程を考察していく必要があると述べる。

玉置らの研究で考える「ずるい」という概念と、この小論の関心とはずれてしまっているので、直接参考にはできないが、幼児の公平研究において「ずるい」を軸にして考えることの有効性があるとする、幼児期に影響を与える社会において「ずるい」という考え方が重要な要素としてあるということなのだろうか。論者としては「優しい関係」が背景にあるのではと考えているのだが、まだ十分にとらえきれ

ずにいる。「優しい関係」とは、先ほども述べたが相手から反感を買わないように常に心がけることであり、それは「ずるい」と言われなくようにすることと同義である。内部の人間関係において、「自己責任」という語りの背後にある「ずるい」という感情のつながりは、日本社会一般にみられるものなのかもしれない。

4. 「世間」

さらに、今まで述べてきたことをより精緻にするために、「世間」という考え方が示唆を与えてくれるのではないかと考えている。「世間」について論じたものとして、鴻上尚史と佐藤直樹の対談である『同調圧力—日本社会はなぜ息苦しいのか』という書籍がある。この小論の執筆中に出版された本で、日本における「世間」を論じるものである。鴻上は以前にも『空気』と『世間』で「世間」について論じている。あらためて「世間」とはどのような考え方なのだろうか。ここでは上記の書籍で述べられている「世間」について概説したい。

上記の書籍の中で鴻上が「社会」と「世間」の違いについて述べている。それによると、「世間」とは現在および将来、自分に関係がある人たちだけで形成される世界のことで、例として会社、学校、隣近所など身近な人々によって作られた世界であり、「社会」とは現在および将来において全く自分とは関係のない人たち、知らない人たちで形成された世界のことで述べたうえで、現在は「世間」というものが中途半端に壊れてしまっているのではという。つまり、隣近所とのお米やしょうゆの貸し借りが当たり前のように行われていた時代においては「世間」が「セイフティーネット」として機能していたが、それが中途半端に壊れた結果、守ってくれるものが中途半端な形でしか存在していない。そのため、互いにつながらなければいけないという、手を伸ばさなければいけないのは「社会」

という自分とは無縁の人たちとの世界で、その人たちとどのように関係を作っていくのか、しかし、社会を広げていくのではなく、今ではセイフティーネットの役割を果たしていない「世間」にすがろうとして苦しんでいるのではということ述べる（鴻上・佐藤 2020：31-33）。

以上に述べたような鴻上の意見をうけて、佐藤がさらに「世間」と「社会」について述べていく。佐藤の意見は鴻上が言う「世間が中途半端に壊れている」という話に対することである。佐藤は「世間」が復活・強化しているのではと考えている。佐藤は「社会」を「ばらばらの個人から成り立っていて、個人の結びつきが法律で定められているような人間関係」と定義し、それに対して「世間」は「日本人が集団となったときに発生する力学」と定義する。「力学」というのは同調圧力などの権力的な関係が生じるからだという。日本人は長い事この「世間」に縛られてきたが、ソサエティ societyを「社会」と翻訳し、世間と訳さなかったのは、社会という言葉が個人や人間の尊厳と一体になった言葉だとわかったからだという。ここで問題なのは「世間」がホンネで「社会」がタテマエという二重構造が出来上がったことだと述べている（鴻上・佐藤 2020:33-35）。

こうした議論をふまえつつ、佐藤は「世間」のルールは4つあると述べている。1つ目は「お返しのルール」といい、モノを貰った時には必ず返さねばならないというルールで、これはメールやLINEのやり取りにおいても関わっている。その例の一つとして「既読無視」についての対応を佐藤は考えている。2つ目は「身分制のルール」といい、年上・年下、目上・目下、格上・格下などの「身分」がその関係の力学を決めてしまうことをいう。3つ目のルールは「みんな同じ時間を生きている」と考える「人間平等主義のルール」である。「先日はありがとうございました」などといった常套句がメールなどで用いられることがあるが、それは同じ

時間を過ごしている、すなわち同じ仲間であることの表明であり、共通の時間を生きているため、感情的な連帯を生むことになり、これが「世間」はみな同じという、独特の人間平等主義につながるという。このルールには、「全部平等」というか、みんな同質だと考えるから、異質な者が外に排除される。つまり『ウチ』と『ソト』ができる」とことと、「個人がない」という2つの意味が内包されていると述べる。4つ目のルールは「呪術性のルール」といい、日本には数多くの俗信・迷信の類があり、それを守ることが求められているというものである（鴻上・佐藤 2020:35-50）。

二人は対談の中で「世間」と「社会」について様々な観点から述べていくが、二人は「同調圧力」という言葉について対談を進めていく。そこでは「同調圧力」という言葉を訳すことが難しいのではという話から、その言葉の抽象性について対談が進められていく。その中で鴻上は、「『世間』って、目に見えない、どこかにいるかもしれない他者、といった恐怖をイメージさせます（鴻上・佐藤 2020:56）と述べる。韓国での目上の人とお酒を飲むマナーの話を例示しながらその具体性を指摘したうえで、「世間」の漠然性を考える。『『世間』の本質とは、その暗黙のルールに従いなさい、みんなと同じことをしなさい、という同調圧力のことですね（鴻上・佐藤 2020:56）』と鴻上は述べる。それに対して佐藤は「世間」が強い日本と述べたうえで、新型コロナウイルスの影響下で行われたエピソードを提示しながら、佐藤は「世間」の同調圧力によって個人の行動が抑制されるのではと述べている（鴻上・佐藤 2020:56）。以降「世間」と「社会」について鴻上と佐藤の対談は多岐にわたってつく。

5. 結 び

この小論で述べてきた「自己責任」「ずるい」

といった考え方の背後には、日本における「世間」と「社会」の二重構造と「世間」における「同調圧力」があるのではと、整理することは可能だろう。ここで考えたいことは、「オタク集団」も今まで述べてきたような特徴を背景としているということである。今回考察してきたことも踏まえながら、「オタク集団」の人間関係を探る過程で、通俗的に語られるような特異な集団としてではなく、その独自性を探り出すことができれば、彼らの人付き合いの特徴をより鮮明に描き出すことが可能であろうし、さまざまな集団との違いを描き出すほどのことがないのであれば、「オタク集団」を通して日本の社会構造を直接考察することも可能になるのではと考えている。今後の研究課題としたい。

注

- 1) (渡邊 2014:37-54), (渡邊 2018:47-52)。で論じている。本稿はこれら研究の継続的なものとして考えている。
- 2) 種村はこの論考において1991年の新聞における「自己責任」概念について焦点を当てた分析を行っている。その際に、「1) 新聞メディアは「自己責任」概念を、「個人的な不公正感」を「社会的な不公正感」に転換する鍵概念として用いたのではなかろうか。2) 新聞メディアは、「社会的な不公正感」を「自己責任の徹底」へ水路づけ (canalization) するために、「自己責任」概念を用いていたのではなかろうか」(種村 2005:147) という2点について指摘をしている。新聞メディアは「個人的な不公正感」を「社会的な不公正感」に転換する鍵概念として「自己責任原則の欠如」を指摘していたのではないかという。

参考文献

- 鴻上尚史・佐藤直樹 2020年『同調圧力—日本社会はなぜ息苦しいのか』講談社現代新書。
- 石川時子 2017年「社会福祉における自己責任と反・自己責任論の諸相」『関東学院大学人文科学研究所報』第40号 3-20。
- 渡邊秀司 2014年「オタクの言説：外部との「緊

張感」を考えるために」『佛教大学大学院紀要』
社会学研究科篇 第42号 37-54。

———2018年「『優しい関係』の展開について
—オタクを事例とした人間関係の考察にむけ
て—」『佛大社会学』42号 47-52。

種村 剛 2005年「『自己責任』の時代：1991年の
損失補てんを事例として」『自然人間社会』
関東学院大学経済学部教養学会 第38号
147-172。

玉置哲淳・山本健司 2007年「幼児は「ずるい」

をどうとらえているか—交代・順番・仲間入
り・独占を通しての公平概念を探る—」『エ
デュケア』大阪教育大学幼児教育学研究室
第27号 15-23。

(わたなべ しゅうじ
社会学部非常勤講師)

(ながみつ たいし
社会学部専任講師)